

『雨が降らない季節』 作・玉井秀和

舞台上に二人。

※ミキはみずほのサークルの後輩。みずほとたかぎはきつと新社会人とか院生とか。ミキは3回生くらい。なんか、旅行サークルとかそんな感じだろう。

みずほがコップの上で空気をもつすごい勢いで吸い込んでいる。それを見つめるミキ。

ミキ「、なにしてるんですか？」

※このセリフ入れるまでにかなり時間とっていい。始まりなので、ゆっくりと。セリフとセリフの間は開けなくて良い。

みずほ「ちよつとまって、今これしてるから」

ミキ「、、(ああ)」

みずほ、吸い続ける。

ミキ、飽きてスマフォとかいじってる。

※ここも3吸いくらいは見せる。

みずほ「ふはあ！（息が荒い）え、なに？」

ミキ「え？」

みずほ「えなんか言ってたじゃん」

ミキ「ああ。え、それなにしてんのつかなくて」

みずほ「え？なにが？」

ミキ「え？だからそれ」

みずほ「どれ？」（※上長すぎるかな。稽古やってみて消すかも）

ミキ「あ、いや、そんな息吸って」

みずほ「ああ、これ？（ミキ）はい」いや、水吸ってたの」

ミキ「???」

みずほ「水っていうか、水蒸気？ほらあるわけじゃんここに。見えないけど、水蒸気」

ミキ「まあ」

みずほ「何だっけ、ほら、ほらあれあれ。ほら、あのー（ジェスチャー）」

ミキ「蒸発？」

みずほ「そうそれ。蒸発してるから、つまりここにあるわけじゃん」

ミキ「そうですね」

みずほ「だから、それを吸ってたら、いつの間にか水を飲んだことになるよね」

ミキ「、、ん？」

みずほ 「いや、だから、コップに口をつけずに、水を飲むことになるじゃん」

ミキ 「んあああ」

みずほ 「すぐくない？」

ミキ 「すごい」

みずほ 「でしょ？ いつの間にか、コップは空になってる訳」

ミキ 「確かに。あでもそれ、吸ってなくても空になるはなりますよね」

みずほ 「、、、えなに？」

ミキ 「あ、いや、あの吸ってるのと同関係ないですよ。水が消えるのと」

みずほ 「、だから？」

ミキ 「ん？いや、だからってわけじゃないですけど」

みずほ 「だから飲んでるって話でしょ」

ミキ 「ああ」

みずほ 「でも不思議じゃない？」

ミキ 「なにがですか？」

みずほ 「ほらだっけ置いてくだけになくなっちゃうんだよ、水」

ミキ 「まあ確かに。イマイチ実感わかないですけど（※うーじー「くけど」語尾が上がりがち。セリフ続きがあるように見せているのは良いのだが、それなら続いて欲しい。語尾を下げて、「くけど、、、」みたいにセリフを終わらせるのも使って欲しい）」

みずほ 「ね。あ、あれかな、もっと暑いところに行ったら実感わくかな」

ミキ 「暑いところって？」

みずほ 「え、なんか南国とか」

ミキ 「あ、あ、あなんか、知ってます？ 南国って雨季と乾季って言って、季節が二つだ

けなんですよ」

みずほ 「え、そうなの？」

ミキ 「らしいですよ」

みずほ 「えじやあ日本は？」

ミキ 「え？」

みずほ 「日本はいくつあるの？」

ミキ 「え4つでしょ」

みずほ 「えそなの？」

ミキ 「春夏秋冬でしょ」

みずほ 「あ、そういうこと？ (ミキ「ええ」乾季と雨季と他に2つあるのかと思った」

ミキ 「ああ、違います違います。乾季は雨降らないんですよ」

みずほ 「えー。じゃ貯水しないとね」

ミキ 「ええ」

やや間

みずほ 「まあ、でもミキちゃんは、そんなに水分いらんか」

ミキ 「えなんでですか？」

みずほ 「えだって、そんなに貯水してるじゃん」

ミキ 「え？ あ、いや、これ貯水タンクじゃないですよ？」

みずほ 「何言ってるんの、8割くらい水分でしょ」

ミキ 「いや、え、いや、そういう？」

みずほ 「いいなあ、ミキちゃんはそんなあつて」

ミキ 「いやいやいやいや、そんなないです、ないです。みずほさんが思ってるほどはないです」(※もつと盛り上がるほうがいい)

みずほ 「思ってるわいよ！ 思ってるわい。全然思ってるわい。私別にあなたのその貯水タンクになんのあれも抱いてませんから」

ミキ 「いや、そうじゃなくて」

みずほ 「じゃあ、なんなのよ」

ミキ 「えじゃあ、逆にいらんんですか」

間

みずほ 「いらんない」

ミキ 「うそだあ」

みずほ 「嘘じゃない。いらんない。いらんないいらんない」

ミキ 「それは強がりですよ、みずほさん」

みずほ 「強がりじゃないもんいらんないもん。そんなに喉乾いてないし」

ミキ 「喉の渇きと関係ないでしょ」

みずほ 「重いもん」

ミキ 「え？」

みずほ 「重いもん。重いもの。重かった」

ミキ 「分からないでしょう。ないのに(※ここは落とす)」

みずほ 「、ありますけど？」

ミキ 「いや、そうだけど」

みずほ 「置いてきたの」

ミキ 「置いてきた？」

みずほ 「そう」

ミキ 「どこに？」

みずほ 「そんなのわかんないわよ。スペースシャトルと一緒に。スペースシャトルも燃料タ

ンクを切りはなすことで高く飛べるでしょ」

ミキ「スペースシャトルはでしょ？」

みずほ「一緒なの。私も高い空に飛び立つためには燃料タンクを切りはなす必要があったの」

ミキ「そうですか」

みずほ「そう。乗って」

ミキ「え？」

みずほ「乗って。いまから銀河鉄道宇宙の旅よ」

ミキ「何言ってるんですか」

みずほ「スリー」

ミキ「みずほさん」

みずほ「トウー。はやくはやく」※みずほに促されてミキは動き出す。

ミキ、搭乗。

みずほ「ワン。イグニッション」

みずほ、点火。宇宙の旅へ。

ガイドとかして宇宙を旅してる。

たかぎ、帰ってくる。

たかぎ「ただいまー」

間

たかぎ「なにしてるの」

ミキ「あ、いや、えっとこれは」

みずほ「旅してたの」

ミキ「みずほさん」

たかぎ「旅？」

みずほ「そう。ミキちゃんと宇宙旅行」

たかぎ「ああ、確かにそんな感じだった。あ、なんか雨降りそうだったよ」

ミキ「え、ほんとですか」

たかぎ「うん。通り雨みたいなの」

ミキ「え、じゃあ振らないうちに帰ろ」

みずほ「えもつといればいいのに」

ミキ「いえいえ、宇宙旅行したし、これで。レポートもあるし」
みずほ「あ、そっかあ」

ミキ「はい。すみませんじゃあ、これで。お邪魔しました」
たかぎ「あ、うん。またおいでね」

ミキ「はい」

みずほ「送ってこっか？」

ミキ「いいですよ。何回きてると思ってるんですか」

みずほ「そう」

ミキ「それじゃあ、お邪魔しましたー」

みずほ「また連絡するねー」

ミキ「はい」

ミキ、はける。

※きやさりんは、声が小さくなりがちなので注意。

たかぎ「ミキちゃん、うち来るの久しぶりじゃない？」

みずほ「え、先月きたでしょ」

たかぎ「え、そだつけ。そうか。あ、雨雨。大丈夫？ 洗濯物」※雨きそうだよ、という
ちよつとした焦りが欲しい。

みずほ「大丈夫大丈夫。干してないから」

たかぎ「、そう。（※一瞬の間で良い）雨大丈夫かなミキちゃん」

みずほ「大丈夫じゃない？ 折り畳みくらい持ってるでしょ」

たかぎ「そっか。急に降るのが多いよな、最近は」

みずほ「そうねえ」

たかぎ「なんかジャングルみたいだな」

みずほ「あ。なんか春とかないらしいよ、南の方の国」

たかぎ「え、どゆこと？」

みずほ「なんか、乾季と雨季しかないの。二つ」

たかぎ「え日本はいくつあんの」

みずほ「それは四つでしょ」

たかぎ「そなの」

みずほ「え？ 春と夏と秋と冬でしょ？」

たかぎ「あ、そういうこと？」

みずほ「なんだと思ったの」

たかぎ「いや、乾季と雨季となんかその他に二つあんのかと思った」

みずほ「ちがうちがう。季節季節」

たかぎ 「二つしかないんだ季節」

みずほ 「らしいよ、南の国は」

たかぎ 「へえ。南ってどんくらいよ」

みずほ 「え知らない。どんくらいだろ。なんかオーストラリアとかじゃない？」

たかぎ 「オーストラリアってどこだっけ？ ヨーロッパ？」

みずほ 「ヨーロッパではないでしょ、牛かってんだから」

たかぎ 「牛かってたらヨーロッパじゃないの？」

みずほ 「うん。違う」

たかぎ 「そうなんだ」

みずほ 「そうそう。ヨーロッパは牛かわない」

たかぎ 「へえ。えじゃあ、その、乾季と雨季ってのはどう違うの？」

みずほ 「どう違うってのは？」

たかぎ 「んー、あつさ、とか？」

みずほ 「暑さはわかんないなあ。でも雨季はずっと雨降ってんの」

たかぎ 「えーなにそれ。梅雨みたいなもん？」

みずほ 「まあそんな感じじゃない？」

たかぎ 「なんか陰鬱な季節だね」

みずほ 「陰鬱ですよ。もうそこらへん水浸しなんだから」

たかぎ 「浸水するんだ」

みずほ 「オーストラリアだから」

たかぎ 「ああ。オーストラリアだもんな。え、じゃあ乾季は？」

みずほ 「乾季はね、逆に雨がふんないの。全然」

たかぎ 「え、やば」

みずほ 「そう。だから、水となくなっちゃうからためとくのよ」

たかぎ 「雨季の時に？」

みずほ 「そう」

たかぎ 「うわ大変だね、オーストラリアの人は」

みずほ 「大変よ」

たかぎ 「もう喉からからでしょ、乾季」

みずほ 「やっぱ節約すんのかな」

たかぎ 「そりやするでしょ」

たかぎ、冷蔵庫へ立つ。

みずほ 「やっぱそっか。あ、私も」

たかぎ 「うん」

みずほ 「ありがとう」

たかぎ、冷蔵庫をみる。

たかぎ 「えなんもないよ」

みずほ 「え、うそ。奥の方にお茶とかあるでしょ」

たかぎ 「え？ ないよ？」

みずほ 「え、うそお」

みずほ、冷蔵庫の方へ。

みずほ 「本当だ」

みずほ、戻ってくる。

たかぎ 「水道水でいい？」

みずほ 「(うーん)」※フィジカルで出す。

たかぎ 「あじやあなんか買いに行く？」

みずほ 「コンビニ？」

たかぎ 「うん」

みずほ 「とお」

たかぎ 「まあ」

みずほ 「自販なかったっけ？」

二人、考えてる。

みずほ 「わかんないね」

たかぎ 「うん。どつかにはあるんだろうけど」

みずほ 「コンビニ(行く感じ)？」

たかぎ 「他ある？」

みずほ 「うーん」

たかぎ 「じゃ、まいつか」

みずほ 「一旦いいかな。また今度」

たかぎ 「そうね」

たかぎ、戻ってくる。

たかぎ 「こんな感じかな。オーストラリアの人」
みずほ 「なんで？」
たかぎ 「雨降らないんでしょ？」
みずほ 「ああ、そうかもね」
たかぎ 「のど乾くなあ」

やや間

たかぎ 「あ、あれやったら？」
みずほ 「？」
たかぎ 「ほらあの吸うやつ」
みずほ 「なんで？」
たかぎ 「え、だから、空気中にこう、いってしまった水蒸気を、こう、逆にコップに戻すの」

みずほ 「え無理でしょ」
たかぎ 「やってみなきゃわかんないでしょ」
みずほ 「いやあ」
たかぎ 「だってコップの水が知らず知らずのうちになくなるってのが実際にあるわけなんだから「あるわけじゃん？」。それよりは不思議じゃないでしょ」

みずほ 「そうかなあ」
たかぎ 「そうでしょ」
みずほ 「うーん。そお？ じゃあ、どうやってやんのよ」
たかぎ 「なんか圧力が関係してる気がするなあ」
みずほ 「圧力？」

たかぎ 「うん。こう、だから。空気中にある水を、こう、ぎゅってしたらいいんじゃないかな？」

みずほ 「なにぎゅって」
たかぎ 「押すの。押して圧力高めんの」
みずほ 「ああ」
たかぎ 「ちよつとやってみよう（※ここで立つ）」
みずほ 「ええ？」
たかぎ 「いいからいいから。ほら、こう」
みずほ 「え？ こう？」
たかぎ 「うん。たぶん」

二人、空中をぎゅってしてる。

※きやさりんは腰をおとすことを意識。空気の球体を二人で共有する。

たかぎ 「いけそう？」

みずほ 「ちよっとまだわかんないけど」

たかぎ 「圧力が足んないかな」

みずほ 「足んないかしんない」

たかぎ 「もっと強めよう」

みずほ 「もっと？」

たかぎ 「いったんいったん」

二人、もつとぎゅってやる。

みずほ 「あなんかいけそう」

たかぎ 「えほんと？」

みずほ 「うん。なんか感じる」

たかぎ 「じゃあもうちよいか」

みずほ 「うん」

激しいぎゅ。

きつと汗がすごい。

みずほ 「あやばい、逃げてる、逃げてる」

たかぎ 「え、なにになにに逃げるって」

みずほ 「そこそこそこそこ」

たかぎ 「どこどこ」

みずほ 「そっちそっち。ちよっとちゃんとやってよ」

たかぎ 「やってるよ。どこよ」

みずほ 「そこっそこっそこだって！」

たかぎ 「どこ？」

みずほ 「違う違う、そこ！そこ！」

たかぎ 「え、どこ？」

みずほ 「そこそこそこそこ」

チャイムが鳴る。

たかぎ「だれだろ」

チャイム何回もなる。

(ミキ「せんばーい」)

みずほ「あ、ミキちゃん。あ、空いてるから入ってきてー」

※ミキが入ってくるまで、「あ、そこ抜けてる」とかやっても良い。

ミキ、入ってくる。

ミキ「え、何やってるんですか？」

みずほ「え、圧縮してんの。あちよっとミキちゃんも手伝って」

ミキ「ええ？」

みずほ「ほら、はやくはやくはやくはやく」

ミキ、参加する。

激しさは増していく。

息切れがすごい。

たかぎ「いけそ？」

みずほ「もうちよい」

たかぎ「おう」

限界が近い。

みずほ「あくる。くるくるくるくる。もっと押してもっと押して」

たかぎ「(押す。息切れがすごい)」

みずほ「よいしょー」

二人の合わさった手から一滴の水滴がコップに落ちる。

みずほ「でああ」

たかぎ「(息切れしてる)」

二人、その水滴を見つめる。

みずほ 「なんか、神秘的だね」

たかぎ 「うん」

みずほ 「すごい達成感」

たかぎ 「うん。なんか全然わかんないけど、神様も最初こんな感じだったのかなって思った」

みずほ 「え？」

たかぎ 「神様も、こんな感じで世界をつくったのかなって」

みずほ 「ああ。かきまぜるやつ？」

たかぎ 「そ」

みずほ 「えじゃあれ？ この水からいろんな生命が生まれたって事」

たかぎ 「じゃない？ わかんないけど、多分。これが生命のスープ」

みずほ 「そうなんだ。大変だね、神様も」

たかぎ 「うん。大変だよ」

やや間

ミキ 「えっと、あの、スマフォ」

みずほ 「ああ」

ミキ 「えっとじゃあ、わたし、これで」

みずほ 「うん。ありがとう」

ミキ 「お疲れ様です」

ミキ、はける。

間

みずほ 「喉乾いた」

たかぎ 「うん」

みずほ 「のむ？」

たかぎ 「いや、だめだよ（※強く否定したい）。それは。その一滴からいろいろな生命が生まれるんだから」

みずほ 「そっか。そだね」

たかぎ 「うん」

やや間

みずほ 「コンビニいく？」
たかぎ 「、、、いこっか」

二人、コンビニに行く準備をする。

たかぎ 「オーストラリアの人も大変だね」

みずほ 「なんで？」

たかぎ 「だって乾季は毎日これでしょ？※クエスチョンマーク」

みずほ 「え、そうなの」

たかぎ 「そうだろ水ないんだから」

みずほ 「そうなんだ」

たかぎ 「いっぱいこっやって水つくってるんだよ」

みずほ 「確かに、コアラとかカンガルーとかよく分からないのいっぱいいるもんね」

たかぎ 「うん。生命のスープいっぱいつくったんだよ」

みずほ 「えじゃあ、あれからコアラ生まれるってこと？」

たかぎ 「いや、俺らからは何生まれるかまだわかんないよ。ほら気候とかも大事だから」

みずほ 「そっか」

たかぎ 「うん」

みずほ 「コアラだといいね」

たかぎ 「え、やだよ」

みずほ 「なんで」

たかぎ 「えだってコアラって握力、室伏くらいあるんだよ」

みずほ 「えそうなの」

たかぎ 「らしいよ」

みずほ 「え、じゃあやだね」

たかぎ 「でしょ？」

みずほ 「うん。じゃなにがい？」

たかぎ 「なんだろ。うーん今はとりまコアラ」

みずほ 「そうだね」

扉が閉まる。